

煉瓦づくり超ノルマ

新潟県 徳永 三四士

昭和二十二年五月十五日、前日十四日午後、転属して来たばかりの鬼の三大隊と言われるれんが工場のある二〇三収容所である。前の年と打って変わって大型機械導入でみな喜んでいたが、そんなものではない。日曜日もない二十四時間三交替制のフル運転ノルマの前には、人間も機械と一緒にである。

私たちのれんがづくりは、生れんがづくりで、粘土を掘って運搬、その本土と水をかきまぜて、機械を通して出てくる粘土を切り、手がかい合って一回に四個ずつ切り、その生れんがを乾燥室まで運搬する順序になっている。

私の仕事は粘土と水をほどよく調整し、適当な速さで切り、手に送り出す一つの重要な作業だ。大変だと思っただが、やることにした。切り手も新参なら調整役の私も

新参である。何日たっても、八時間の作業時間帯に五千個から六千個が精いっぱいだ。

そのような毎日で、いかに努力をしてもなれないため、七千個以上はできない。後になって聞いた話だが、ノルマとしては、一作業時間帯当たり一万個以上なのだそう。だ。ともかくいかに一生懸命頑張っても七千個以上できない日が続いた。

月があけて六月三日、遂に運命の日が来た。三日午前零時から八時までの時間帯、私どもも必死に頑張った。ソ連の係官も、作業が終わるまで付きっきりで見守っていたが、作業が終わった時点で聞いたところ、七千六百個しかできず、収容所の門前まで来たところ、収容所長が通訳を従えて待ちかまえている。何かあるなと感じた。

所長いわく、七千六百個しかできないのは、切り手の二人と、かくはん機を運転している者が相談し合って数量の制限をしている。小隊長と切り手の二人、かくはん機を運転している者、計四人は規則に反する行為だ。直ちに営倉に入れる。明日もこのようなことだと地区の憲

兵隊に突き出すと言ひ渡される。

夜半から働いて、朝食も食はず、普段、人の住んでいない建物なので、冷え切っているため、防寒着は取られて襦袢一枚では何としても寒い。床は張ってあるがぬれているので、立っていなければならず、眠ることもできず、二人一組になり、背中を合わせてお互いの身体でわずかな暖をとることにした。

昼飯はなし、午後四時ころになって、収容所にいる小隊の者が私たちを氣遣つて営倉の修理に来る人に朝食のパン(二百五十グラム)を届けてくれた。身体が冷え切っているので、それくらいのを食べても暖かくならない。何としても寒いのはやり切れない。

午後八時過ぎ、ようやく日が落ち、四方がうす暗くなるころに、営倉に足音が近づいて来る。やっと営倉にお別れかなと思つたら、鍵をあけて入つて来たのは、衛兵所にいる将校の取り計らいで、私たちの食事を持って来たと言ふのだ。昼の食事ではあるが、暖かい雑炊だ。息もつかせずいっきに食べる。大変うまかつた。

身体も少し暖まり、ようやく生きた心地だ。午後十時

四十分ころ、衛兵所から使ひの者が来て、営倉からようやくのことで出所することができた。収容所の食堂へと急ぐ。あつたかい夕食を四人で食べる。まことにうまい。食べ終わると、急ぎ小隊に戻り、全員喜んでくれた。が、十一時を過ぎていたので、すぐに十二時からの作業時間のため、整列が待っていた。

二十四時間一睡もすることなく、収容所から五、六分のれんが工場へ、足どりも重く歩き出す。シベリアにも天の神がある。れんが工場に着いた自家発電のボイラーが故障して、ボイラーがとまっていた。技師が一生懸命修理をしていたが、なかなか直らないのだ。とまっているボイラーに身体をくつつけて横になる。二十四時間眠っていないので、すぐに眠る。ボイラーの修理が完了して起こされた。朝五時ころであつた。全くの天の助けである。

作業になれもあつてか、六月十二日ころより数も多くできるようになり、作業時間帯に遂に一万个できた。収容所長はじめ作業主任も喜び、もちろん私たちが一番うれしかった。日に日に多くできるようになり、七月二十

六日には最高の一万七千三百個できる。かくして九月二十日、年間ノルマの四百五十万個を突破して生産を終了した。日曜もなく全くの休みなしの四か月間だった。

生き抜いた

シベリアの抑留苦勞の四年

高知県 那須 忠 男

独立混成第三百旅団も、終戦とともに作業隊第十五大隊に編入、そして黒河経由、ソ連ブラゴエ地区に渡り、貨物列車でのシベリア抑留の旅となり、二日に一度の食糧の配分もまちまちで、貨車の中は暗く、昼か夜かもしれない旅が続いた。真夜中、ふと停車した小さな駅で、一人の死者を下ろした。そして列車はすぐ発車した。

十月二十六日早朝、列車は停車、全員下車の命令が出た。すでにその地は積雪、寒さは身にしみた。そして第三十九地区ジスガスカム収容所に入所した。収容所の給

与は、コーリヤンのスープと一日三百グラムの黒パンであつた。十一月に入り、作業命令が出て、私は河川工事場の作業となり、川にたまった山から十字鍬で掘り出した石を背中にロープで負い、地面を這うようにして運ぶ毎日が続いた。

零下数十度という寒さ、川辺の風は特別に強く、空腹と労働とで栄養不良者が続発して、収容所の病院は満員で、続いて出る病人は入院することができなく作業に出るという状態で、何の手当てもなく作業から帰り死亡という、恐るべきシベリア抑留の第三十九地区収容所での残酷な労働のスタートだった。

二十年、二十一年の春にかけての死者は数百人出たと聞いた。人ごとと思えない、明日の生命に全然自信がなく、遂に私も作業場で三十九度余りの高熱が出るようになり、私は作業場がれんが工場に変わった。野外の作業を思ったとき、屋内の仕事で、私は生命に明かりが見えた思いで、二名の兵隊を受け、作業に着いたが、だれも三日と続かないという、両方の作業のノルマの板挟みで大変だった。